



あをあをとギャベ絨毯のいのちの樹  
 淋しさは首に憑くもの緋のマフラ  
 寒星のひとつ落ちたる沖の女郎  
 舌のごと垂るるシベリア寒気団  
 冬曙還らぬものの息づかひ  
 奥羽嶺は白きたてがみ大旦  
 少名毘古那神の糸をひく屠蘇よ  
 寒晴や飴切る音の歌ふやう  
 火と水の神よ御神酒の口に塩  
 息災や二日とろろを門かどに撒く  
 松過ぎや灯漏れるる漆倉  
 一湾に幾千の波生るる冬  
 でかんしよや山椒効かせて牡丹鍋  
 地平へと向かうキャラバン年の暮

\*

岩井かりん  
 志摩晴樹  
 久保美智子  
 我妻民雄  
 有手 勉  
 小林邦子  
 後藤冴子  
 金子圭子  
 西牧千恵子  
 古畑富美江  
 竹内 薺  
 塩原英子  
 太田 薫  
 樋上照男  
 楠木ひろこ

正月や早寝早起き爺憎し  
 なみなみの夜さの焙じ茶雪に和す  
 桃吹きてほつほつと和みけり  
 仕事場へ行かぬさみしさ五日かな  
 一息に吞まれて落暉冬の闇  
 ニライカナイ目指し出航漁始  
 火の番のだんだん増えてゆく夜道  
 円陣を組みひそやか夜の鹿  
 吾の心の中心となる初茜  
 着ぶくれてユトリロの絵の坂のぼる  
 情死らし青首大根荒蕈  
 冬の土啄つづくや鶴の眼の昏き  
 永遠とわに見えぬ我が死顔や虎落笛  
 極月や銀の耳環の足場鳶  
 譲らるる湯口近くや年の暮

今井愛子  
 米山節子  
 日詰千恵子  
 斎藤剣岩  
 佐竹伸一  
 小谷一夫  
 金子圭子  
 栗原利代子  
 曾根原とうこ  
 田村英一  
 村上 紬  
 森 みゆ紀  
 塚本回子  
 山崎和之  
 加藤律子



作者のユーモアがある。山椒を効かせた尋常な食べ方にも。

地平へと向かうキャラバン年の暮 鏑木ひろこ

無限という語を唱えながら、整い過ぎた砂漠の地平を思い描く。もとより、映画「アラビアのロレンス」の壮大さを云々するまでもないが、このキャラバンの行く末はいかん。

惜しまれて仕事を止めるさみしさー日常の哀歎を詠み秀逸

仕事場へ行かぬさみしさ五日かな 斎藤 剣岩

「五十八年間の治療院を閉める」と左注。へおしまれておしまれて去る寒椿も同時作。佐藤健の同業者。俳句会もともに励み、府中の剣岩、幸子コンビは評判の仲良し。鍵、詔子も同じ。正月五日は仕事初めであったか。行こうか、行かないか。いやもう行けないのだ。このさみしさは当人と

今月の秀句

正月や早寝早起き爺憎し 今井 愛子

へ人間の皮着る夫に雑煮椀 こんな句も同時にある。愛情以上の愛が深いのである。正月くらいはのんびりしたい。主婦の本音だ。ところが、普段の習慣から夜八時には床へ入り、朝四時にはごそごそ動き出す。やっこれから朝寝の佳境という時に、飯と騒ぎ出す。飯といえは目の前に出て来る日常であった。へ冬晴や佐渡が流れて来る近さの秀作にも注目した。

ある。叩き終わってからも余韻が残る。不思議さへの気付きがいい。

円陣を組みてひそやか夜の鹿 栗原利代子

好きな短編に『円陣を組む女たち』（古井由吉）がある。三月の夕暮れの公園で十人ばかりの若い娘が円陣を組んで奇妙な輪を縮める冒頭の描写をふと思いついた。あれは学生運動絡みの話だったが、掲句は夜の鹿が円陣を組む描写に新鮮さを感じた。奈良公園の鹿がそうだった。鹿の円陣は人間よりも深い本能を思わせる。ここにも不思議がある。

吾の心の中心となる初菫 曾根原とつこ

二十代の若さを強調するわけではないが、初々しい。新年初の茜空の崇高さを忘れて久しいことにはっとした。

着ぶくれてユトリロの絵の坂のぼる 田村 英一

モンマルトルのサクレ・クール寺院の裏側にあるシャンソン酒場「ラパン・アジル」に立ち寄り、ユトリロの住んだ家を案内されたことがある。ふと思えば、そのとき歩いた坂道であったか。作者の青春の憧れがここにあるう。「着ぶくれて」が切なくていい。

情死らし青首大根荒蕪 村上 紬

実景か想像かは問わない。世はさまざま。生きるとは何かを思えば、愛に殉じた掲句の荒蕪に青首大根が無雑作に置かれ、その間に情死体が横たわる光景も信念に生きた姿であるう。一夜の火花のような人生、その純真さに打たれる。

ても沈黙する以外にない。閉院は考え抜いての決断だろう。その間句作を怠らない律義さに深く感動していた。

なみなみの夜さの焙じ茶雪に和す 米山 節子

「夜さ」は夜の意。雪深い越後長岡のさらに深雪の地が天地。たつぷりと焙じ茶を飲んで雪腹を温める。佳句である。

桃吹きてほつほつと和みけり 日詰千恵子

綿の木の実が弾け白い綿が吹き出す。あの白さは幸せいっぱい気分だ。るんるんではない。ほつほつ気分。なんともいい。人には言えないいい気分。感覚がシャープ。独特な流し目をして、個性がある句を作り、楽しんでる。お見事。

一息に呑まれて落暉冬の闇 佐竹 伸一

山国の冬。たそがれが忽ち、すとんと日暮れに。落日が一筋の夕映えも残さないで、猛然と襲いかかる闇に呑まれて行く。地獄でも来世でもない。まぎれなく生々しい闇の現世。東北の朝日山地の真冬の自然を捉え、重厚な一句である。

ニライカナイ目指し出航漁始 小谷 一夫

沖繩人の伝承としての異界「ニライカナイ」信仰は胸を打つ。特定の地域があるわけではない。そこを目指して漁始とは出漁の本質を突いている。魚を獲るとは神様からいただくこと。信仰心がそこにあるう。感動する。

火の番のだんだん増えてゆく夜道 金子 圭子

火の番の心理を捉えて巧みだ。暗い夜道は拍子木を叩き、いつか火の番とは何だろうと自問自答を繰り返す。滑稽さも

冬の土啄くや鶴の眼の昏き 森 みゆ紀

多摩動物園詠という。鶴は容姿ばかりで、眼を気にしたことがなかった。その昏さへの着眼に虚を突かれた驚きがある。繊細で多感か。あるいは意外に獐猛か。

永遠に見えぬ我が死顔や虎落笛 塚本 回子

見たいだろうか。長い間に多くの臨終の顔に接してきた。いずれも苦渋を留めないように綺麗に化粧された顔ばかり。わが母親の顔が美しかったことに感動した。創られた顔と思いつながら、真実の人生がそこにあると感じた。我が顔はもう後の人の話題に任せたい。北風よ吹くなら吹け。

極月や銀の耳環の足場 山崎 和之

十分に堪能させられる句である。俳味よりもこつてりと人情味を出す。やくざばさを漂わせ太々した人間俳句を目指す。

譲らるる湯口近くや年の暮 加藤 律子

共同浴場でのスナップにして、温かい人間味を巧みに掬いあげている。生活感が平凡ではない。

推薦候補作をあげる。

冬なれば母の手織の紺深し 高橋 龍治

胡犢狙ふ獵師必殺礼文島冬 田添 博美

レコードに落とす針先初氷 手島 互

可愛げのなき冬すみれ活けにけり 小松左社子

宿木いくた神の大梨喰い殺し 渡辺 光